



(上) 久保田敬一氏 (左) 黒河内四郎氏 (右) 平井喜久松氏

鐵道省の三博士

一 記 者

昨年の秋、我が鐵道省から同時に二人の工學博士が出た。一人は鐵道次官久保田敬一氏他の一人は東京改良事務所長平井喜久松氏である。三土鐵相は二人とも高師附屬中學時代の教へ子であると云ふので我子の様に喜んだとの事であるが、我々は先年論文により學位を授與せられたる工務局長黒河内四郎博士の存在と俱に我鐵道界の爲に又一般土木學界の爲にも實に喜ばしい事であると思ふ。

學界と言ひ事業界と言ひ、我が土木界は近來非常な不振である。折角大先輩が蒔いてくれた建國の技術の大本を忘れて、種々な惡思想に壓迫され、手も足も出ない盜安の姿であ

る。

認められようが、或は、また認められまいが、兎に角に自分の職分を楽しみ、本分に向つて眞劍に研究的努力を捧げてこそ、技術も發展するのである。

○

久保田氏が次官の要職になり乍ら學位論文を纏めた努力にも敬服するが、然も其論文が『本邦鐵道橋の沿革に就て』と言ふのである次官などになると兎角土木など、言ふものは忘れ勝になるものだ、勿論仙石貢博士の如きは鐵道大臣になつて然も當時内閣の重要人物と推されてゐても、猶且つ俺は一介の土木家

だと云ふて其専門を尊重してゐた。

久保田次官は曾ては研究所に在つて鐵道橋梁の設計調査に没頭した事もあつた、今日我國の橋梁製作術が外國に劣らぬものとなつてゐるのも其邊に原因してゐるのである。久保田博士は建設事務所に在つては制服制帽で上越線の現場を驅廻つた事も忘れられない事であらう、或は自費を以て洋行した事も、何れは皆技術家本來の眞面目であつた。信仰の技術家であり碩學であつた廣井勇博士の教をうけた久保田氏は頑固な文部大臣たりし久保田讓男の嗣子である。一高時代には野球の新人として元氣なプレイを喧傳されたものだ。

技術家には早老者が多い、土木界不振の一原因も其所にあると思ふ。斯界の爲に特に久保田博士の健在を祈るものだ。

○

『工』と言ふ字は、上の一は天をかたどり、下の一は地をかたどり、中に人ありて天地を支えてゐるのである。……云ふ言葉が記者の頭にふと思ひ浮んだ、それは七、八年前の鐵道省黒河内保線課長の卓上談に聞いた事であつた。

工は即ち技術家を指したものである。自分が一生の天職として没頭してゐる技術に對して一般技術家が何程の自覺を有するか、實際は甚だ疑はしいのであるが、如何に日常に追はれても、如何に多忙な生活をしてゐても自分の職分に對してだけは自己本來の眞面目を有し度いものである。

黒河内四郎氏はあの巨軀を保線課長の椅子に托する事數年間、割合に異動の速かな鐵道省としては相當永い間であつた。其間に工務局長は三人も更迭した。然し黒河内氏は動かなくかつた。大自然に於て水は流るれども山は動かさずと云ふ有様で、何事にも常に堯舜として餘裕綽々たるものがあつた。其後鐵道省の大異動のあつた時、氏は建設局長に轉じた。而して『狹軌軌道の強度に就て』と云ふ論文に依つて學位を授與された。これは勿論保線

課長當時の研究に依るもので我國の種々なる汽關車に依つて軌條に如何なる應力を生ずるかを究められたものである。

今日我國の鐵道が狹軌であり乍らも世界に冠たる所以のものは種々の原因があるが、今や堂々と外國品を壓倒してゐる軌條の發達、其目醒しい我國の軌條の發達も此等研究の賜物と思はれる。

黒河内博士は其後大河戸工務局長の退官後工務局長を兼任する事數ヶ月、池田嘉六氏が建設局長に複活するに至つて、工務局長專任となり今日に及んでゐる。

○

東京改良事務所長平井喜久松博士の論文は『小樽室蘭間に於ける石炭船積設備及び貨車操車設備の設計に就て』と云ふのでつて、勾配に依る重力を自然的に利用する、簡單にして經濟的な積込方法と操車方法との創案である。而して此の新設備は此の十二月十七日から使用を開始せらるゝ事となつてゐる。

平井氏は永い間、本省工務局改良課に在つて各地の改良工事設計に當つてゐるが、大正十二年の關東大震災後の東京附近の鐵道改良工事には特に氏の技術的關心が最も多く現はれてゐる。其後氏は工務局改良課長となつて再び全國的に改良工事に關與するに至つた。而して特に船車連絡設備其他の改良考案に關し氏の興味は集中されたものらしい、今回の學位論文も此間に收材されたものである。

平井氏の改良課長生活は頗る短かつた、其後の鐵道省異動で橋本敬之氏が大阪市電氣局建設部次長に赴任した後へ東京第一改良事務所長として轉じ、久しい本省生活を離れた。其後東京第二改良事務所を合併して東京改良事務所長となり今日に及んでゐる。

平井喜久松博士は我國鐵道の元老の一人たる故平井晴二郎博士の次男であり、明治四十三年の東大土木科出であるから、鐵道三博士中の最も若い方である。

(をばり)